

Educational Impacts of Intercultural Experiences on Japanese University Students: A Study on Intercultural Communicative Competence

日本の大学生に対する異文化接触の教育的効果  
— 異文化間コミュニケーション能力に関する考察

社会システム研究科 文化・言語専攻  
2015M41001 柴田 弓子

(論文要旨)

近年、急速な情報技術の発達や輸送手段の拡大により、異文化との交流はますます身近なものとなってきている。しかし、文化背景の異なる人々との接触や交流が増えたとはいえ、地域紛争やテロ、移民、領土問題等は世界各地で発生しており、異なる文化や宗教、イデオロギーに対する理解が深まったとは言えない。「何を信じ、何を受け入れ、何を行っていくのか」、社会を構成する人々の価値観や役割も変わっている。

このような変化の多いグローバル社会の到来にともない、小中高等学校では異文化間能力の育成が教育目標の一つとされているものの、外国語教育の一環としての外国事情もしくは自文化理解が主な内容となっているのが実情である。言語や文化に対する理解を深めることはできても、自らのもつ常識や価値観を変化させ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することは難しい。一方、大学教育においては、海外の大学や非営利団体や企業と協力し、留学、ホームステイ、インターンシップやボランティアを通して学生交流を行う取り組みが活発になってきている。また、海外に出るだけでなく、大学キャンパス内外で留学生のチューターや外国人居住者の日本語教育のボランティアに従事するなど、日本に居ながら異文化交流を行う学生も少なくない。様々な交流が行われる中で、異文化体験によって、「語学力の向上」や「複眼的な見方」などの肯定的な変化を取り上げている先行研究がある一方、異文化適応という観点から今後の課題も報告されている。青年期にある大学生の適応という観点から、発達の観点による理解も含めた質的な研究の必要性を感じた。そこで、国内外の大学生の異文化接触に焦点をあて、発達段階にある大学生の異文化間能力という観点から彼らの体験がどのような変化をもたらしたのか、また変化の過程においてどのような要素が関係しているのかについて研究することとした。

第1章では、異なる言語や価値観を持つ人々の間で行われるコミュニケーションにどのような文化的要因が関与しているのか、文化とコミュニケーションについて探る「異文化間コミュニケーション」という概念について、教育と文化の両方の観点からまとめを行った。第1節では日本の学校教育におけるこれまでの異文化理解に対する取り組みの変遷、第2節では心理学的な観点による文化の概念、第3節では異文化適応についての知見をまとめた。

第2章では、異文化間コミュニケーションの理論的枠組みについて、米国と日本の異なる文脈で発展してきた異文化間能力モデル(Intercultural Competence Model)を取り上げ、それぞれの構成要素と構造を検討している。また、米国と日本の研究者による先行研究から、国内外における異文化接触の教育的効果と研究課題について考察し、異文化接触経験者の調査への示唆を得ることとする。

第3章では、異文化接触経験者に行った半構造化面接(質的調査)及びオンライン調査(量的調査)についての対象者と方法について提示している。日本の大学に在籍している異文化接触経験者は、学校教育の内容または家庭環境によっては入学前もしくは在学中に既に異文化交流を経験していることも少なくないことから、本調査では接触地域を国外、国内に限定することなく調査対象者としている。

第4章では、調査対象者の異文化接触経験の振り返りに見られる異文化間能力を構成する要素とそれらが示すものについて、第2章で述べる理論的枠組みに触れながら分析を行う。質的調査による分析結果から、Self-awareness(自己/自文化に対する認識)、Empathy(共感)とSelf-disclosure(自己開示)の3つの要素が相互に関連し、より望ましいコミュニケーションへと段階的に発展していくことが認められた。また、3つの要素の中でもSelf-disclosure(自己開示)は、異文化接触経験者によっては困難であると感じる場面が語りの中に見られ、第1章第2節で触れる「文化的差異」の影響が示唆された。限られた期間における異文化接触経験の質をより効果的に高めるには、異文化接触時に遭遇する葛藤や困難を解決する際に支えとなる周りのソーシャルサポートが重要な役割を果たしていることが分かった。さらに、必要なソーシャルサポートを得るためには、異文化接触者本人が自らのことについても思考や感情を適切に伝えられるコミュニケーションスキルを身につけておくことが望ましいということも示唆された。一方、異文化接触経験者に自身の経験についての質問項目から自己評価を行うオンライン調査からは、異文化接触経験は国内外に関わらず、人間関係や自己成長、語学力等について、全体的に肯定的な結果が得られた。これは、先行研究の結果とも一致することから、日本人大学生の異文化接触経験による教育的効果は経験者自身から高く評価されていることが伺える。

本研究での対象者の多くは、異なる言語や文化について学ぶ機会の多い文系の学部学科に所属している学生であった。今後の課題として、理系の学部学科に所属している学生など、対象者の幅を広げ、学年による違いなどの分析も必要となってくると考える。海外だけではなく、国内においても、さらには日頃関わっている身近な人々との間においても異文化交流が行われている現在、異なる考えや価値観を受け入れ、相互理解や協力的関係を築くことができるよう、コミュニケーションの質を高める工夫が必要であると考える。